

「遙かな友に」

新井 宏

「まんじ」の同人・鯨游海さんの漢詩サロン「鯨游会」に平成十九年七月から参加している。本来は鯨さんから漢詩を学ぶ会だったようであるが、私が参加した頃から、漢詩勉強会と共に鯨飲会の性格も強くなっていった。

二ヶ月に一回のペースを保っていて、参加してから既に五十回ほどになる。今回は百四十二回というから二十五年近くの歴史がある。

主人公の鯨さんが昨年来、体調を崩して五回ほど欠席したが、その間も間断なく続いているのは、何よりも鯨さんの人柄であろうが、それと共に、幹事の伊藤清功さんのお世話のお蔭である。

伊藤清功さんは、鯨さんの銀行時代の後輩であるが、詩吟にも長じている。なにしろ、美声で、時には会場外まで圧するほどの声量で、鯨さんの「七言絶句」などを即吟する。

伊藤さんのもう一つの趣味は美声を活かしたコーラスである。町田市の男声合唱団「マルベリー」のセカンド・

テノールで、有力団員の持ち回りらしいが、公演に誘われた頃は「団長さん」と呼ばれていた。合唱団は平成元年の創立で、団員は四十名〜五十名、平均年齢は現在七十歳とかで、有名企業の経営者OB等も大きな声を張り上げている。

美しい響きの団名「マルベリー」は創立時の指揮者高桑勝氏の名前「桑」に因むというが、語源は英語のように、スウェーデン語、フランス語、スペイン語も共通である。

濃紫色の桑の実はストロベリー(葉ベリー…いちご)に似て、食糧難で甘い物のなかった幼い頃よく摘まんで食べた。

定期公演会はいつも町田市民ホールで行われているが、九百ほどの席がほとんどいっぱいになる盛況である。毎年、耳慣れない新しい曲にも挑戦しているが、やはり安心して聞けるのは、「フォレスト風」のレパートリー曲、

古典的な合唱曲や唱歌、学生歌、懐かしのメロディ等である。

アンコール曲にしばしば出てくるのが「遙かな友に」である。早稲田大学グリーククラブを指導した磯部俣の作詞作曲というが、各大学のグリーククラブの定番曲で、静かで緩やかな曲想、歌詞もそれほど特別には思えない。しかし、不思議に魅了される。

1 　　しずかな夜ふけに　　いつもいつも

　　思い出すのは　　おまえのこと

　　おやすみやすらかに　　たどれ夢路

　　おやすみたのしく　　今宵もまた

2 　　あかるい星の夜は　　はるかな空に

　　(繰り返し)

3 　　さびしい雪の夜は　　いろいろのはたで

　　(繰り返し)

歌詞の全体的な印象は、去りゆきし恋人を思いながら「おまえ」と呼びかけているように思える。しかし「安らかに」とあるので若くして逝った友かも知れない。ところが「おやすみ楽しく」ともあるので、あるいは郷里の友、病める友、障害のある友のようでもある。いずれにしてもそこには、青春の「懐かしさ」が漂っている。

合唱曲の中で似たような印象を持つのが、シューマンの「流浪の民」である。伴奏のピアノ曲が単独でも演奏されるほどメロディが華麗であり、古風な訳詩も「懐かしさ」を漂わせる。しかもこの曲は、わが青春と共にあった。

前号の「月は上りぬ」でも、母校都立小山台高校のことを書いた。入学当初から新聞部の主力メンバーとして、放課後は校舎中央部にある八角塔の下の部室に詰めて黑板报新聞の記事を書いていた。

部室の斜め下には音楽室があり、いつも放課後、女生徒が「エリーゼのために」を練習していた。練習とはいえ、生の音楽は心地よいものであった。

そうこうしている内に、合唱コンクールでも近づいたのであるうか、「流浪の民」が始まった。

ピアノが響く。混声合唱が天使の声に聞こえる。それをまたピアノが昂揚する。それ以来合唱曲といえは懐かしさに満ちた「流浪の民」となった。曲想が大きく異なる無伴奏の「遙かな友に」ではあるが、不思議なことに懐かしさは共通する。

「遙かな友に」についてインターネットで調べてみる。作詞作曲の磯部俣は大正六年、東京大森生まれの合唱指導者・作曲家で十五年間早稲田大学グリーククラブの専

任指揮者を務めた。ポニージャックスの育て親でもあり、元学習院長の磯部忠正の弟だという。

曲が作られたのは昭和二十六年、早稲田大学グリークラブが神奈川県津久井溪谷・夫婦園で夏合宿をしていた夜、新入部員が枕投げなど大さわぎをしてなかなか寝ないので、「何か静かな曲を作ってください」という四年生部員の依頼によって、その場で即興的に書かれ、四人のパートリーダーによって歌われたと伝えられている。この頃、早稲田のグリークラブは分裂騒ぎで荒れていたことも関係していたのかも知れない。

夫婦園は、私の住む相模原市の緑区青根にある。

ついでにインターネットのユーチューブで「遙かな友に」を聴いて見る。

そこには各大学グリークラブに混じって、都立八潮高校合唱部が登場する。そういえば当時の八潮高校はNHK合唱コンクール常連の最優秀校であった。昭和二十七年から三十一年までの五年間に四回も優勝している。

そこで閃いた。もしかしたら、この「遙かな友に」を八潮高校の文化祭で聞いていたのではないかと。きっとそうだ。そうに決まっている。

そして昨年、筋ジストロフィーという難病で逝った川上初美さんのことを思い出した。

それは昭和二十九年秋、私が小山台高校二年生の時であった。卒業した荏原第四中学校の五期生であったので、初めての同窓会準備の実行部隊として、一学年下の後輩達と共に走り回っていた。その中に八潮高校に通う川上初美さんもいた。

記録を見ると同窓会は十一月中頃に行われている。

おそらくその反省会の席であろうか、川上初美さんから八潮高校の文化祭に誘われたのである。八潮高校は府立第八高等女学校の後身で、私の通っていた小山台高校（府立第八中学校）とは何かと「対」の関係にあった。絶好のチャンスと大喜びであった。

ところが、その前夜の反省会で、先輩達と焼酎の梅割りやガブ飲みして、酷い二日酔いとなってしまった。先輩と言ってもほとんどが二十歳前で、誰もまともな酒の飲み方を知らなかった。

さすがに、頭痛と吐き気で苦しかった。朝、家を出たが、よほど途中で引き返そうかと思ったほどで、文化祭もふらふらしながら見て廻わり、川上初美さんと会えたのかどうかさえあまり記憶がない。ただ、体育館か講堂の垂れ幕にNHK合唱コンクールで最優秀賞を受賞したと大書されていた。そして薄暗い会場に入り、腰掛けてみると、多少二日酔いもおさまってきた。

この年のNHK合唱コンクールのラジオ放送は、十一

月中旬に行われたので、文化祭が合唱部の凱旋公演だったに違いない。当然、課題曲、自由曲の他に、いわばアンコール曲も演奏されたであろう。「遙かな友に」が入っていたとしても全く不思議では無い。

もしかしたら小山台高校の「流浪の民」も、NHK合唱コンクールに向けて準備していたのかもしれない。だからこそ、「遙かな友に」を聞いて「流浪の民」と共通する不思議な懐かしさを感じたのであろう。

その後、川上初美さんとは三十年間以上、全く没交渉であったが、昭和六十三年になって、荏原第四中学校創立四十年周年の同窓会を開きたいとの学校側の要請で、昔の関係者が招集されたのが縁となり、年賀状の交換が始まった。

いつもご主人と連名の美しい賀状の余白に、小さな文字で五〇八行びつしりと近況を伝えてくる。ほとんど途切れる年もなく、昨年の賀状まで、十五年間ほど続いていた。

年賀状だけの交流が続いていた中で、東日本大震災の起きた平成二十三年の三月二十六日、わが母校の荏原第四中学校が統廃合で無くなってしまおうというので、最後の同窓会が開催された。

その時、初期の卒業生グループの中心として、一学年

下の六期生が主体となって会の設営をしてくれた。

創成期の同窓会から何かと深く関わり合っていた私ではあったが、地元を離れて既に四十年も経っていた。幹事会に出席すれば、最年長組となるかも知れない。やはり適当な理由を付けて欠席した方が無難である。しかし、最小限の協力はしなければならぬ。

そこで、賀状などを頼りに個人的な交友関係をたどり、連鎖メールチェーン(幸福の手紙方式)によって同期生に出席を勧誘することにした。

これは、手数もかからずなかなか効率的であった。この種の会は、誰が出席するか判らないと、つい気後れするものであるが、知人からのチェーンメールなら様子が分かり、出席してみる気になる。その結果、意外や意外、直近の卒業年次を除いて、最も多くの参加者を集めることが出来た。

会場には、多数集まった五期生の他に、一学年下の六期生グループも群れを作っていた。しかし、そこには川上初美さんの姿はなかった。最終同窓会の総務役ともいうべき遠藤京子さんに訊ねると、川上初美さんは、数年前から筋ジストロフィー症を病み、もう首が動かず、ほぼ寝たきりの生活だという。

しかし、まさかそんなはずはあるまいと思った。

そう思つて、その年(平成二十二年)の年賀状を見ると「……荏原四中の先生方への賀状も数学の久保田先生と体操の藤田先生だけとなり淋しいかぎりです。新井宏先輩もどうか今年もお元気で貴重なご研究を進められてくださいね。勉強させていただいています……」と例年と特に変わった様子を見せていない。

その前年(平成二十一年)を見て「……昨年は白内障の手術をしてやっと世間が広くなったような気がしましたが、そろそろ好きな読書習慣をとり戻さないとますます世相にうとくなりそうです。今年もご活躍のほどをお祈りしております……」とある。既に筋ジストロフィーの症状が進んでいたはずなのに、不安な表情を全く見せていない。

いやそればかりではない。同窓会の翌年(平成二十四年)の賀状にも、「……昨年の四中の同窓会に出席した石井敏夫さんが、新井先輩、とてもサツソウとしていたと電話を下さりうれしく思いました……」とあり、例年と何も変わらない。石井敏夫さんは小山台高校の後輩でもあり、既にリタイアしていたが、テレビ業界ではかなり知られた人物である。

ついでに同窓会の翌々年(平成二十五年)の年賀状も見ると、「……新井先輩を見習って何か自分でも出来そうなテーマを見付けられたらと思ひながら下らない三文シナリオを持ち込んで脚本家の先生に笑われています……」

と、ここでも病氣のことには何も触れていない。

当方からの年賀状と言えば、いつも不特定の友達宛に、同一文で近況を書いて送るだけのものである。確かに「近況」にしては詳しい内容であるが、川上初美さん宛に、特に追記した記憶もない。それなのに、いつも丁寧につき合ってくれていた。そして気付いた。

筋ジストロフィー症とは、未だ治療法が確立されていない難病で、進行性の遺伝性筋肉萎縮によって、初期にはつまずきやすくなり、やがて歩行困難、更には多臓器で障害が起ると言う。川上初美さんの場合の経過は知らないが、おそらく、かなり前から病氣には気付いていたのではなからうか。当然、社会生活は大きく制約されたであろう。活動的であった彼女にとって外界との遮断は、耐えがたい苦痛であったに違いない。そのため、私の賀状でさえも、彼女にとつて「小さな窓」であり情報源となっていたのではないか。それを利用して友人達との交流をしていたのではないか。それにしても、衰え行く身体と向きあうことがどんなに不安であるか、私の今の歳になると判る。

年賀状をもっと遡つて読んでみる。いつも明るく便りしてくれた川上初美さんでも、その中に、筋ジストロフィー

一に気付いた頃のことが見れているかもしれない。

そう思っただけでみると、平成十七年の賀状には「……この一年ほど民族・宗教について考えさせられた年はありません。結局は自分の生きる道を見誤らず生きるしかないでしょうが……」とあり、平成十九年にも「着々と偉大な業績を残されていらつしやる新井先輩をとても誇りに思っています。そろそろ店じまいを考えている自分が情けないです」とある。その頃から症状が現れていたのにちがいない。

それにしても、世の中には、病気になるとその不安を軽減するため、やたらと自分の病気のことを語る人が多いが、他人に不安を転嫁したところで、自分の不安が軽くなるはずはない。いやむしろ不安を増殖するのが関の山である。それに比べて、川上初美さんが何とすばらしかったことか。

彼女の最後の年賀状は昨年(平成二二六年)のものである。いつものようにご主人と連名の賀状に、ご主人の字で「家内は手の痺れでペンが持てませんが頑張っております」と書かれていた。

そしてその年の年末には、ご主人から「……初美が二月二日に七十五歳にて永眠しました……」との悲しい連絡が届いた。けなげな年賀状を頂戴した直後には、もう

既に「遙か空に」逝っていたわけである。

実は、川上初美さんについては、高校生の頃の印象しか残っていない。色白で清楚、快活、理知的な佳人であった。七十歳過ぎても「新井先輩」などと言う童女でもあった。

それから六十年間、お互い、高校生の頃の先輩・後輩のままの交友だった。だから、本稿も旧姓の川上初美さんで通したが、いつも連名で賀状を送って下さったご主人は伊藤英也さんという。彼女に相応しい心優しい人柄だったに違いない。

どうやら私の人生、中学校の友達でも、高校の友達でも、大学の友達でも、職場の友達でも、よいヤツから先に逝く。女性も例外でなく佳人から逝くらしい。

あかるい星の夜は 是るかな空に
思ひ出すのは おまえのこと

おやすみやすらかに たどれ夢路
おやすみたのしく 今宵もまた

来年のマルベリー合唱団の公演でもまた、アンコールにこの無伴奏男声四部合唱「遙かな友に」が唱われるであろう。その時は、我が青春時代を思い出しながら川上初美さんを思っただけだ。